

〈奥〉つしまの〈間〉の〈オクレ〉の構造

菅田正昭

本土と島との地理的・精神的な隔絶感が〈間〉を形づくり、本土からみれば島々はすべて海面のオク（沖・奥）に位置する沖つ（奥つ）島である。また島は、その遠距離性ゆえに聖性（オクリ⇨送り・贈り）と賤性（オクレ⇨後れ・遅れ）の両面を併せ持っている。島々の真の振興には、オクレからオクリの島へと、その聖性の復権を目指さねばならない。

聖性と賤性の両面を併せ持っている〈沖つ（奥つ）島〉

島はそれ自体が〈間〉を持っている。すなわち、本土との距離感がその〈間〉を形成している。その距離感には地理的なものと精神的なものとの二つがある。その距離感には地理的―精神的な隔絶感が〈間〉を生み出す要因となっている。オク（奥）という概念はオカ（陸・丘・岡）からの視座である。遠くを眺めた時の眼差しである。陸地の上における

遠さは〈奥〉だが、それが海へと適用されるとオキ（沖）となる。すなわち、海上におけるオクが〈オキ（奥）〉である。奥と沖（奥）は同一語源のコトバである。

島は沖つ白波が立つと水平線に見えたり隠れたりする。ただたんに波間に浮かんだり沈んだりするだけでなく、霧がかかったりすると、島という存在自体が見えなくなってしまう。梅雨時には材木座あたりからさえ江ノ島が見えなくなってしまう。遠くの間々がそうであるように、奥や沖の広義の〈オク〉は実に、危うい存在なのである。

その視えないときの空間を〈間〉として捉えることができるのかどうか、奥とは危うい、あやふやな〈場〉なのである。いいかえれば、オクとは、本来、〈不可視〉の領域にある〈場〉だ。もしかすると、〈間〉として認識されない可能性だつてあるわけである。人によって、オクに存在するであろう〈間〉が視えないこともあるのである。

本土―島という構造を考えると、島という存在は本土からみると、そのすべてが沖津(つ)島である。海面上のオク(奥)に位置する〈沖つ島〉¹¹〈奥つ島〉である。この〈沖津〉の距離感、ある島が本土からのくらい離れているか、というハナレ(離れ)の感覚である。それは人によってかなりの差異があると思われるが、その距離感が大きければ大きいほど、〈離れ島〉としての隔絶感は大きくなる。いいかえれば、〈間〉は拡大する。その島が人の住む島であるならば、島の側からの本土への距離には、大きな隔たりの空間が存在することになる。

しかし、本土に住む人がその隔絶を感じることはほとんどない。島からは本土が視えていても、必ずしも本土から島が見えているとは限らないからである。それは現実の視覚でもあるが、本土が普段は島を意識していない、という側面もあるだろう。本土と島のあいだには歴然として〈間〉があるにもかかわらず、本土はあたかも〈間〉が存在しないかのように振る舞ってしまう。蓋(けだ)しくも、そんなことに

思いが至らないのである。このとき、島の隔絶性の〈間〉は無化されることによって、島という存在は二重の意味で疎外される。距離的にも精神的にも、である。

〈沖つ〉観はここから発生する。もちろん、〈沖つ〉は〈奥つ〉と同源である。そこで、この感覚の原基にあるオク(奥)・オキ(沖)という語について、あらためて『広辞苑』で確認しておこう。

おく【奥】①内へ深くはいった所。外面から遠い方。「穴の―」「山の―」⇓⇓口②物事の秘密。深遠で知りにくいところ。心の中。(以下略)

おき【沖・澳】①海・湖などで、岸から遠く離れた所。「―の小島」②田畑・原野の開けた遠い所。

要するに、遠く離れた所がおく・オキであり、山側に奥海側に沖の字が当てられる。ここで、注意しなければならぬのは、オク(奥)に内面性の義があることだ。すなわち、①の「内へ深くはいった所」から②の「物事の秘密。深遠で知りにくいところ。心の中」の意が生じてくる。つまり、奥なる所は秘密の場所であり、かつ深遠な場所である。いいかえれば、聖なる所である。

ところが、聖性は時として真逆の賤性へと転化する。な

ぜなら、深遠である所には、一般人はなかなか近づくことができないからである。奥の尊さとか、深遠な秘密というものには近付き難さが限界点あたりで固定化すると、その存在が疎^とまれたりして差別の対象へ変化することがあるからだ。

オク（奥）・オキ（沖）はその存在自体が距離的にも精神的にも近付き難さという宿命を負っている。そこから聖性も生じてくるが、同時に、賤性の引き金にもなる両面性を持つことになる。〈間〉の存在がその二面性を引き起こすのである。空間的にも時間的にも、聖性と賤性の両面がオク・オキには具備されているのである。〈沖つ島〉はその典型である。

本土との〈間〉が「差延」を生み、 賤なる場として零落する島々

オク・オキの聖性と賤性の両面を最も典型的に表わしている言葉として、オクリ（贈り・送り）とオクレ（遅れ・後れ）がある。もちろん、他動詞五段活用の「送る・贈る」でも、自動詞下二段活用の「後る・遅る」でもよい。一見、「送る・贈る」と「後る・遅る」ではずいぶん意味が違うように感じられるが、これらの語は同根である。古語と現代語では活用の形も違ってくるが、『岩波古語辞典』（註1、以後IKJと略称）は「おく・り【送り・贈り】四段活用」と

「おく・れ【後れ・遅れ】下二段活用」について、次のように記している。

おく・り【送り・贈り】《オクレ（送・遅）と同根。オクリは意志的に後からついて行くのが原義。転じて、後から心をこめて人に物をとどける意。オクリ・オクレの対立は、意思的な解^とキに対する、自然的な成行^ときを示す解^とケ・裂^さケの類》

おく・れ【後れ・遅れ】《オクリ（送・贈）と同根。自然の結果として、後からついて行くようになるのが原義。転じて、跡に残される意。また、つとめても力及ばず間^とに合わない意》

「送り・贈り」と「後れ・遅れ」が同根であることはよくわかるが、IKJの説明はどうして、オクリとオクレが分岐したのか、という原因がつかみにくい。そこに、オク（奥）という概念を導入すると、もつと、解かりやすくなる。なぜなら、「送り・贈り」も「後れ・遅れ」も、オク（奥）を語源とする語であるからだ。

オク（奥）とは、深遠で多少なりとも神秘的な場である。聖なる所と言ひ換えてもよい。神が坐^まします場所である。そこからは何かが送られてくる。神は人間に対して、絶え

すがたまさあき
菅田正昭



昭和20年東京生まれ。学習院大学法学部卒業。同46年から49年まで東京都青ヶ島村役場職員、平成2年から5年にかけて同村助役を務める。著書に『日本の島事典』（三交社）、『アマとオウ―弧状列島をつらぬく日本的靈性』『隠れたる日本靈性史』（たちばな出版）、『古代技芸神の足跡と古社』（新人物往来社）、『第三の目』（学習研究社）ほか多数。現在、自身のホームページ「でいらほん通信」で独自のシマ論を展開している。日本民俗学会会員。

ず何かを発信している。その送信を人間が受信できるか否か——は別にして、いつも何かを送ってきている。

たとえば、それは稲種の内なる稲の靈魂として稲靈（トシダマ¹¹年玉）であるかもしれない。その神からの〈送り〉を上手に受信すれば、一粒万倍の豊作となる。つまり、神からの〈送り〉ものは〈贈り〉ものになる。つまり、〈送り〉は一般的なものであり、〈贈り〉は〈送り〉を、ありがたいものとして受容する視座とか感情から発する。もちろん、この関係性は人間どうしについてもいえる。相手をストーリーカーと認識すれば、どんな贈り物も恐怖の迷惑な送り物ではないが、恋人からならば嬉しいプレゼントになる。ところが、オク（奥）は遠い所である。距離的にも精神的にも、その遠距離性の〈間〉が人びとを惑わす。オク（奥）が送（贈）っているのに、その遠距離性の故に届かない。実際は

送ったのに届かないということもあるだろうが、もう届いているはずなのに相手が気付いてくれないということもあるだろう。いずれにせよ、受信する側にとっては、届かないことは「後れ・遅れ」である。この関係性はオクリとオクレが同一の語根（註2）〈OKURI（…）〉から派生した同源の語であることを証明している。

そして、この関係は〈沖つ〉島にも適用できる。なぜなら、オキ（沖）もオク（奥）と同源の語であるからだ。すなわち、オキとオクは〈OKI（…）〉という同一の語根を持っている。沖・奥・送・贈・後・遅も語根〈OKI〉を共有しているのである。つまり、〈沖つ島〉が〈聖なる島〉として想われれば、島の存在自体が〈贈り物〉として受容される。

島がアイランド・テラピー（註3）を発信しているにもかかわらず、それに気付いてもらえない。島に住む人が特

産物を送ろうとして、波浪で船が欠航して届かないということもあるだろう。まさに、「後れ・遅れ」である。もちろん、島へ何かを送る場合も同様のことがある。たとえば、わたしは、相手が速達で郵便物をポストに投函したのに、一ヶ月も経っているのに返事もくれない、と言われて、ようやくつながった電話で怒られた事がある。寝耳に水の出來事である。届いていない速達郵便に返事なんかできないのである。しかし、相手は速達で出した以上、もう届いていると思いついでいるのである。

フランスの哲学者ジャック・デリダ（一九三〇～二〇〇四）によれば、「差延（différance）」である。デリダの造語で「遅らせる、延期する」の意味を持つ、デリダの哲学のキーワードというべき概念である。デリダはさまざまな場面で「差延」について論じているが、「届かない手紙」（註4）という概念を通して考えたと理解しやすい。

本土から島への郵便も、島から投函する場合も、しばしば「差延」が生じる。たとえ届いたとしても、依頼状の場合、回答の期限切れということもありうる。電話での連絡も来ないのだから、依頼を断つたのだと思われかねない。こうした状態が常態化すると、そうした島は本土からはオクレの地と見られるようになる。〈間〉が「差延」を生じさせるのである。そのとき、賤なる場として零落してしまうのである。ただし、その零落の引き金となった差延の〈間〉

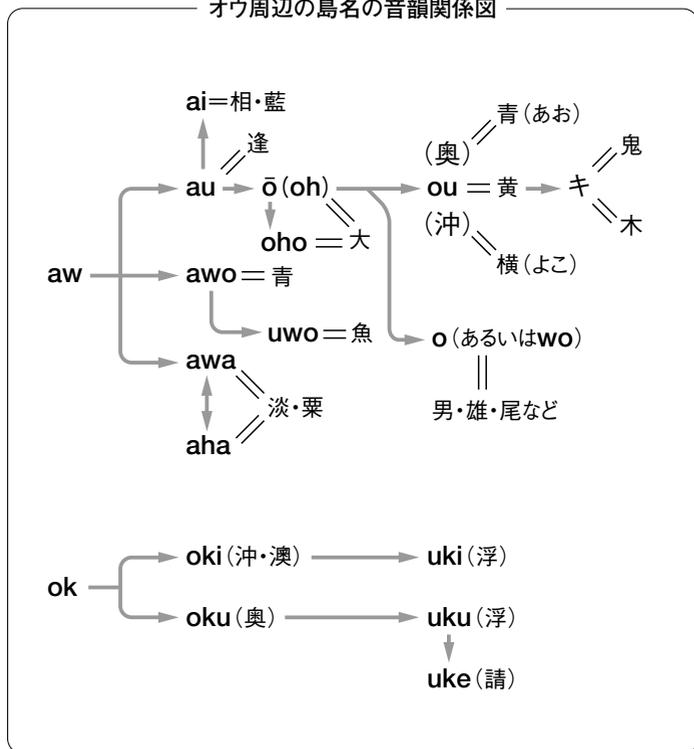
は、「自然の賜物」であると同時に「歴史の賜物」（註5）でもある。

要するに、ちよつとした〈間〉の歪みが、オクリ（送り・贈り）とオクレ（後れ・遅れ）を分岐させる。それがあたかも対立しているかのように、〈聖―送り・贈り〉、〈賤―後れ・遅れ〉として現われる。もちろん、オク（奥）・オキ（沖）は「送・贈・後・遅」のすべてが内包されているのである。沖つ島、すなわち、沖ノ島・沖島・奥ノ島・奥島…という名称を持つ島は、そうした四要素を持つ聖性と賤性を兼ね備えた島ということになる。

オクレ（後れ・遅れ）から オクリ（送り・贈り）の島への復権を

ところで、奥・澳にはオク・オキのほか、オウの音韻もある。そこで、オウ周辺の音韻、すなわち、オウ・オー・オホ・オオ・オフ・アウ・アフ・アハ・アイ…等々の、ここに漢字を充てはめれば奥・沖・青・大・逢・黄・横・淡・粟・藍・相…等々（註6）を島名に冠する島々は、その原義がオク（奥）・オキ（沖）から発していた可能性がでてくる。もしかすると、島々はすべて「沖の小島」と思われていたのかもしれないのである。ちなみに、このあたりの関係を図示してみると、次のようになる（「オウ周辺の島名の音韻関係図」を参照）。

オウ周辺の島名の音韻関係図



オウとオク・オキの違いは、視線の角度（アングル）（註7）ではないかと思われる。海面上に限って言うならば、オク・オキは遙か水平線上に位置する地理的空間である。

たとえ大きな島であっても遠距離にあれば、小さく見える。すなわち、島全体を捉える眼の角度は小さい。そして、その島より小さくても手前であれば、眼が捉える角度は大きい。おそらく、オウはオク・オキより手前にある海面を含んだ概念である、と考えられる。

本来、オウという概念はオク・オキを含んでいた、とわたしは考える。出雲國意宇郡（島根県松江市の周辺）や丹後國加佐郡凡海郷（京都府舞鶴市の周辺）のオウ・オホや、さらに、『新撰姓氏録』（註8）の「攝津國神別」の「天孫」系の凡河内忌寸・凡海連、同じく「河内國神別」の「天孫」系の凡河内忌寸らの根拠地（瀬戸内海の延長として古代の血沼の海）は、オク・オキを包含したオウであったと思われる。ちなみに、「凡海」を冠する氏族は安曇氏と溶け合って、北九州地域や瀬戸内海沿岸の海辺の各地に点在していた。

その広い概念のオウからオク・オキが分岐していったものと考えられる。原初オウは常世やニライカナイの異界を抱えたカオス（混沌）の聖性を持っていたが、分岐後のオウは周辺の島より面積が大きかった場合、「大島」という地名に遺っただけである。宗像大社の

沖津宮が鎮座する沖ノ島のような（神の島）は今日でも（聖性）の典型のような島だが、中津宮のある大島は、境内地は聖であっても、島全体の聖性は失われている。ちなみに、周辺の島々と比較しても小さな部類の島なのに、「大島」と呼ばれている島は、名称だけに原初オウの靈性がとどまっている、といえよう。

四国八十八カ所に次ぐ観音霊場とされる「島四国」の小豆島は、古代は吉備國兒嶋郡（現在の児島半島は古代は島だった）の沖の、アヅミの音韻を想起させるアヅキ（小豆）島だったが、おそらく、原初オウの解体の影響であろうか、一〇世紀の初めには讃岐國の所屬となり、当然、それ以前は神々の島であったはずなのに、『延喜式』神名帳には一座もその名をとどめないのである。その代わりに観世音菩薩が坐しますようになったといえるかもしれないが、島が聖なるが故の、賤性の地域をその後発生させてしまったのである。

おそらく、原初オウの解体・分岐は、古代ヤマト王権が壬申の乱を経て古代天皇制として確立していく過程で、本土の内部にも在った聖なる地としてのシマの消失と、島のハナレ（離れ）化は符合しているものと考えられる。しかし、その時点では、（沖つ）島が必ずしもオクレを持っていたとは思われない。それは、やはり「歴史の賜物」なのである。

島が賤なる存在へ転化していくのは、流人を聖なる島へ配したことに由来する。流人は王権にとつてのケガレ（穢れ）の対象だが、その穢れを祓ってくれる場所として、遠くの（離れ島）が選ばれたのである。ところが、聖なる島へ行けば、そのケガレはたちどころに除去されるのに、流した側の人びとはケガレの移動の結果、聖なる島にはケガレが滞留・蓄積して、やがて穢れが拡散した賤なる島と思ひ込むようになってしまった。そこに（奥つ）島の遠距離感が加味され、かつては聖性の（贈り）の発信地だった島全体がオクレの対象へと零落していくのである。本来、離島振興法を含めた四法は、その聖性の復権を目指すものでなければならぬ。

かつて昭和四〇年代～五〇年代に青ヶ島村長をされた奥山治（一九一八―二〇〇〇）は、陳情書を出すとき、青ヶ島の島名の前に、あたかも枕詞のように「文化果つる」を冠した。それは青ヶ島が文化的に劣っている、という意味ではない。むしろ、文化の地であるのに、国地（本土）が青ヶ島を「遅れた地域」と認識し、しかも見捨てている、ということに抗議するときの逆説的表現だ。ちなみに、八丈流人（ずいん）・近藤富蔵（一八〇五―一八八七）の『八丈實記』によれば、青ヶ島には六つの古名があるが、その共通要素から祖形を抽出すればオウがシマとなる（拙著『アマとオウ』を参照。すなわち、オウの島である）。

現在、本土では、とくに、都市部におけるクニ（国でもシマでもない、ある種の権力装置）の脱宗教化が進行しているように思える。そこでは聖性も賤性も失われている。そうした中で、原初オウの復権を目指して、敢えて言うならば、島における宗教的巻き返しとしての聖地意識の奪還が必要ではないか、と思っている。オクレ（後れ・遅れ）をオクリ

（註釈）

註1…大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典補訂版』岩波書店、一九九〇年。

註2…同系のコトバの中に見い出される共通の意味。あるいは、もう、これ以上は分析できないコトバの要素。ローマ字で表記すると、この部分だけは変化しないコトバの根っこ。語基・語幹も同じ。くで表す。

註3…平成一〇年前後、国土交通省の前身の国土庁や、厚生労働省の前身の厚生省の肝煎りで推進された「健康の島づくり」のための運動。島のスピリチュアリティの発揚を根底に、観光を含めて島々が「癒しの空間」になることを提唱した。ここでは、もう少し広義の、島嶼が本来、持っている靈性の義で捉えてもらいたい。

註4…ジャック・デリダ著 若森栄樹 大西雅一郎訳『絵葉書ーソクラテスからフロイトへ、そしてその彼方』水声社、二〇〇七年の中でも展開されているが、フランスの精神分析医で哲学者のジャック・ラカン（一九〇一〜八二）との論争の中で提起された「盗まれた手紙についてのゼミナール」の部分はまだ刊行・収録されていないようである。日本では東浩紀（一九七二〜）がデリダを踏まえながら『存在論的、郵便的』（新潮社、一九九八年）と、『郵便的不安たち』（朝日新聞社、一九九九年）の中で展開した。註5…カール・マルクス『資本論』第一巻、第四章。ただし、マルクス

（送り・贈り）として復権させなければならぬのである。それは（間）の復権でもある。

この括弧内の言葉は、剰余労働における労働の生産性についての指摘である。鈴木鴻一郎責任編集『世界の名著43 マルクス・エンゲルス』（中央公論社、一九七三年）。

註6…菅田正昭編著（日本離島センター監修）『日本の島事典』（三交社、一九九五年）の「自伝的離島文化論（序に代えて）」の「オウの発見」を参照してほしい。のち、それをもっと拡げて『アマとオウー弧状列島をつらぬく日本的靈性』（たちばな出版、一九九九年）を上梓した。詳しくは同書を参照。

註7…かつて「世界に冠たる」と言われたイギリス。すなわち、イングランド（England）の語源はEngle（アングル、角度）に由来する、と言われている。ヨーロッパの大陸側の住人が島の住民に対して「隅っこ・角っこ」の義として、やや蔑称的に呼んだのが始まりという。しかし、そこから誇り高きアングロサクソン（Anglo-Saxon）が登場してくる。

註8…古代氏族の系譜を記した事典ともいべきもの（ただし、原本は伝わらず、現存するのはその抄本）。嵯峨天皇（在位八〇九〜八二二）の勅を奉じて、桓武天皇の皇子の万多親王らが編し、弘仁六年（八一五）奏進したもので、京と畿内に本籍を持つ一八二氏を、その出自・家系によって皇別・神別（天神・天孫・地祇）・諸蕃（漢・百濟・高麗・新羅・任那）に分類したものである。